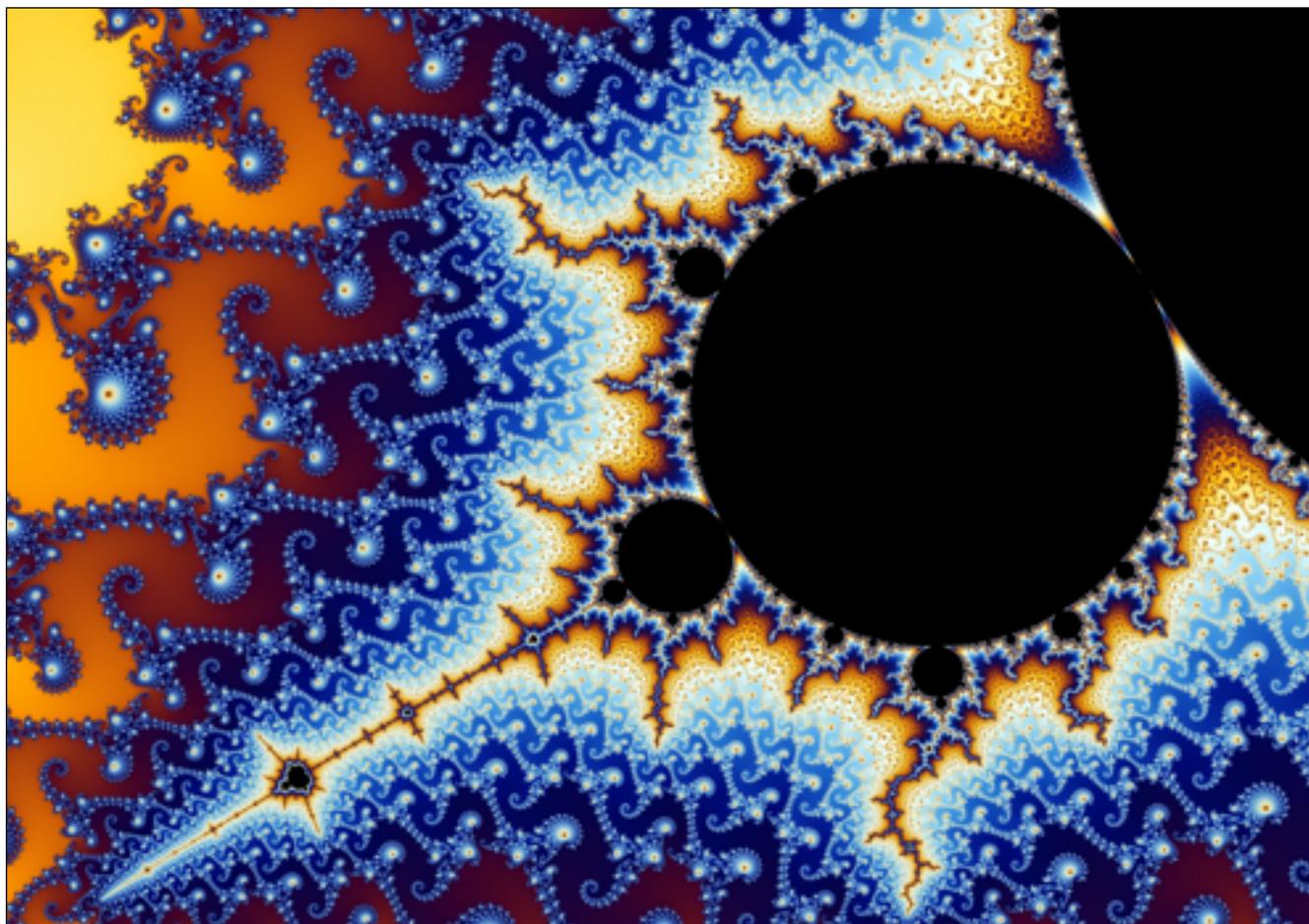

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 3

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

41. 人間の発達に関するデカルト的二元論思想:先天性・後天性論争を超えて
42. 生得論と経験論の暗黙的融合
43. 初期経験論と新経験論
44. プラトン→カント→チョムスキーへと受け継がれる静的構造主義の系譜
45. 学習プロセスと静的構造モデル
46. 三つの代表的な静的構造モデル
47. ピアジェを始めとした段階モデルの限界:発達の線形性・非線形性
48. 新ピアジェ派の台頭:静的構造思想とその批判者との対立史
49. 発達理論のパラダイムシフト:発達理論の思想潮流
50. 既存のパラダイムの死と新たなパラダイムの誕生
51. ピアジェおよびコールバーグの段階モデル:可変性の隠蔽
52. 領域特定型発達モデルの誕生とその限界
53. 発達の共時性:ロビー・ケースの実証結果
54. 新生得主義の誕生とその限界点
55. 新生得主義の研究:ピアジェが提唱した年齢水準の引き下げ
56. ピアジェの貢献:スキル獲得の構成的なプロセス
57. 認知構造と活動の分離:チョムスキー派とピアジェ派の思想的限界
58. 構成主義的アプローチ:デカルト的発達思想・静的構造思想を超えて
59. 発達という動的な運動:年齢と発達段階との関係性
60. 現代発達理論を呪縛する4つの誤謬思想

41. 人間の発達に関するデカルト的二元論思想:先天性・後天性論争を超えて

発達理論の歴史を紐解くと、私たちの知識やスキルが生得的なものなのか後天的なものなのかという議論が盛んにおこなわれていました。こうした議論は、デカルト的な思考の枠組みに大きな影響を受けています。

実際のところ、生得論者の思想と経験論者の思想は、心とその他のものを切り離してしまうデカルト的二元論の表と裏を成します。つまり、私たちは生得的な心の構造を持っていると主張する生得論者の視点と、経験が私たちの心を形成すると主張する経験論者の視点のどちらも、同じくデカルト的な二元論に起源を持っているのです。

人間の発達を「氏か育ちか」という観点で説明しようとするこれらのアプローチは、どちらもデカルト的な認識論に起源を持っているだけでなく、私たちの心の発達を説明する際に大きな限界を内包しています。もちろん、デカルトの思想は、哲学や科学の分野に大きな貢献を果たしました。

しかし、デカルトが採用したアプローチの根幹にあるのは、還元的な発想です。こうした発想では、人間の行動・思考・感情といった動的なプロセスをどうしても正確に説明することができません。人間の精神活動は実に動的なシステムであるにも関わらず、デカルト的発想の下、私たちの精神活動を静的な構造とみなすパラダイムが醸成されました。

このパラダイムの枠組みでは、精神活動が内包する構成的な特性や自己組織化という特性が蔑ろにされています。そうした特性を無視するばかりか、このパラダイムの傘下にいる発達論者は、人間の発達を氏か育ちかと議論する無益な論争を未だに熱心におこなっており、発達を静的な構造とみなす思想を強化する結果に陥っているのです。

確かにデカルトの還元主義的アプローチは、探求対象とする事物や現象を複雑な関係性から切り離して説明するため、科学的な分析において大きな役割を果たしてきました。しかしながら、デカルト的なアプローチを心の説明に採用してしまうと、私たちの心が他者の心と相互作用するという要素や、環境や文脈などとの相互作用を排除してしまうことになります。

それらの相互作用を理解することは、まさに人間の発達を持つ可変性を捉える鍵となります。現実世界において、多様なシステムやプロセスに存在する相互作用が変化や運動を生み出しています。すなわち、心の構造は、千変万化する多様なシステム間の関係性から動的に生み出され、それは決して生得的な静的構造でも経験的な静的構造でもないのです。

42. 生得論と経験論の暗黙的融合

前回の記事で、生得論者と経験論者の争点とデカルト的二元論が既存の発達理論のパラダイムにもたらしてきた影響について述べました。発達に関する両極の議論は、ここ一世紀以上続いています。両極に属する近年の発達論者の議論を俯瞰してみると、どちらも厳密の意味で生得論的主張でも経験論的主張でもないという新たな特徴が浮かび上がってきます。

そうした特徴に加え、両者の立場が暗黙的に融合されているという状況が見受けられます。つまり、現代の発達理論というフィールドにおいて、発達を生得的・内在的なものとする立場と、発達は経験によって生まれるとする立場の境界が曖昧になり、両者が融合された理論的な枠組みが存在しているのです。

しかし、両者の融合モデルは、結局のところ、デカルト的な発想に呪縛されているという点に注意が必要です。両者の融合モデルにおいて、私たちは生まれた時から内在的に核となる知識体系やスキルシステムを持っており、それらは学習によって拡張されなければならないと想定されています。

生得論・経験論の融合モデルでは、そうした核となる知識体系やスキルシステムが生涯に渡って質的に変化するかどうか、あるいは成人に達すると変化が生まれぬのかという点などを議論しています。しかし、そうした議論がなされる際に、ある一つの決定的な問題が潜んでいます。

それは、人間の心を環境や文脈と切り離してしまっているという点です。そこでは、人間の思考が行動や活動と切り離され、心が組成される方法とそれがどのように現実世界で機能するかを切り離してしまっています。カート・フィーッシャーのダイナミックスキル理論では、人間の思考と行動・活動を切り離すことなく、心を文脈に位置づけて議論するため、生得論・経験論の融合モデルとその点において異なっていると言えます。

43. 初期経験論と新経験論

ジョン・ロックを始めとする初期経験論において、人間の心が持つシステムの要素や、活動が心に及ぼす影響などは強調されることがありませんでした。初期の経験論は、私たちの心は環境から受け取る感覚的経験によって形成されると考えていました。

また、新経験論は、私たちは環境から受け取る感覚的経験という情報を処理する機能を持っていると主張し、それらの機能を知覚分析などによって明らかにしようとします。しかしながら、初期経験論にせよ、新経験論にせよ、心と文脈を切り離す二元論的なアプローチを採用していることに変わりはありません。

新経験論で提唱された「情報処理機能」は、認知心理学に大きな影響を与えました。経験論の影響を受けた認知心理学的アプローチにおいて、心の構造をコンピューターの情報プロセスのように扱う傾向が見受けられます。

しかし、実際のところ、心を情報処理システムとみなす理論のほとんどは、心の構造が持つ質的に異なる階層構造を明らかにしてくれません。すなわち、それらの理論は、ある構造からさらに高度な構造へ到達するメカニズムを明らかにしてくれることはなく、仮に可能だとしても、それらの現象の大まかなスケッチを描くことに留まっているのです。

44. プラトン→カント→チョムスキーへと受け継がれる静的構造主義の系譜

これまでの記事で、心の発達に関する生得論的アプローチと経験論的アプローチの議論について見てきました。デカルト的発想に縛られた両者のアプローチは、本来動的であるはずの心の構造を静的なもののみなしています。

丹念に文献調査をおこなってみると、両者のアプローチは、デカルト以前、古代ギリシャのプラトンまで思想起源を遡ることができます。プラトンは、イデア論で有名なように、私たちの心とは独立したところに事物の本質が存在すると主張しています。

つまり、プラトンの思想において、私たちが抱く概念や思考の類いは、全て事物の本質の虚像にすぎないとされています。プラトンは、事物の本質は物質世界と独立したところに存在し、私たちは学習や成熟に伴って、事物の本質を想起する(思い出す)と考えています。

プラトンの思想潮流を汲み、その後18世紀にカントが登場しました。カントは、哲学者として有名ですが、モラルの発達を考察した発達論者でもあり、私たちは内在的な認知構造を備えて生まれてくると主張しています。つまり、カントは、私たちが経験に意味を与える心の構造の存在を指摘していたのです。

そして現代に時間軸を移すと、ノーム・チョムスキーやジェリー・フォーダーなどが静的な認知構造について言及しています。彼らは特に、私たちの言語構造に焦点を当てており、それを「モジュール」と呼んでいます。彼らの思想において、モジュールは言語習得パターンを規定し、それは生得的に私たちに備わっていると主張されています。

生得論者、経験論者、上記の思想家にせよ、人間の心の本質的な構造を静的なもののみなしていることに変わりはありません。確かに、現代の発達理論のフィールドにおいて、それらの理論的枠組みを再考・修正する試みがなされているのは確かです。しかしながら、それらの試みの多くはデカルト的な二元論の範疇に留まっています。

心の構造を静的なもののみならず上記のようなパラダイムは、私たちの思考や行動が内包する可変性を説明することができません。これまで見てきたように、2000年に及ぶ西欧哲学の伝統的系譜に縛られた発達思想が、なぜ可変性を説明することに失敗したのかを理解すると、動的構造主義が果たす役割が自ずと浮かび上がってくると思います。

【追記】:個人的に、西欧哲学の伝統に基づく発達思想の限界を見るにつけ、ダイナミックシステム理論の果たす役割のみならず、東洋思想の意義を再認識しています。ダイナミックシステム理論と東洋思想の探求をおこなっていると、両者の間に親和性を見いだすことができると思います。そのため、伝統的な発達理論、ダイナミックシステム理論、東洋思想などを横断的に学習すると面白いと思います。

45. 学習プロセスと静的構造モデル

これまでの記事で述べてきたように、デカルト的な思想は、科学の領域や心理学の領域の支配的なフレームワークとなっていました。そのため、本来動的である人間の心のみならず、自然科学や社会科学における様々なシステムが静的な構造として扱われるようになってしまったのです。

つまり、デカルトの思想に端を発する静的な構造モデルは、自然界のシステムや社会システム、そして心という動的なシステムを説明する際の暗黙的なパラダイムとして用いられていました。こうしたパラダイムが跋扈し、私たちはそうしたパラダイムを無意識的に採用してしまうため、静的構造モデルの思想を乗り越えていくことは困難になっていました。

しかし、多くの研究が示しているように、自然界のシステム、社会システム、私たちの心は非常に動的な性質を持つ以上、静的構造モデルを超えたパラダイムが必要となります。静的構造モデルにおいて、往々にして心の構造と私たちの行動・活動を切り離してしまうことがあるという点を、これまでの記事で度々指摘してきました。

例えば、コミュニケーションを通じた知識伝達が一例です。しばしば、心は知識という物体を格納する容器のようなものであるというメタファーが用いられます。このメタファーにおいて、人間のコミュニケーションは、知識という物体を一つの容器から他の容器へ移すプロセスとみなされています。

学習という観点からこの例を考えてみると、もし学習者が学習を通じて伝達されるべき知識を適切に受け取ることができなかつたら、その生徒は望ましくない学習者とみなされてしまうでしょう。しかしながら、最近の研究結果はこうした知識伝達プロセスを支持しておらず、生徒は単純に知識を他者から受け取るわけではないことを指摘しています。

そもそも、コミュニケーションを通じて授受される知識というのは、一つの静的な物体ではなく、善かれ悪しかれ動的に変化するものなのです。さらに、知識というのは、実際の活動を通じて学習者の中で徐々に構築されていくものであり、静的な構造モデルは、学習が持つこうした構成的な要素を蔑ろにしているのです。

46. 三つの代表的な静的構造モデル

発達理論のフィールドにおいて、心の構造を静的なもののみなしてしまう思想モデルが存在することを、これまで紹介してきました。これらの理論的枠組みを細分化すると、下記の三つの静的構造モデルに分類することができます。

一つ目は、ピアジェの発達段階モデルです。ピアジェの発達段階モデルにおいて、認知構造を一つの形式として規定し、人間の活動はそうした形のある構造によって規定されてしまっています。つまり、ピアジェの段階モデルは、人間の多種多様な活動を認知構造という定まった形から生み出されるものとしています。

より詳しく述べると、発達段階の成長過程を連続的なものとみなすピアジェの段階モデルは、様々な文脈における活動を一様に決定づける一つの構造が存在することを主張しています。ピアジェは、こうした構造を「普遍構造」と呼んでいます。また、発達段階は文脈によって何ら影響を受けないと想定されています。

二つ目のモデルは、多くの言語学者や認知科学者が採用している理論的枠組みです。このモデルにおいて、人間の活動は、あらかじめ定められた論理的な規則に基づいて生み出されるとされています。例えば、チョムスキーが提唱する生得的な言語構造は、このモデルの典型例です。

三つ目のモデルは、多くの経験論的心理学者が採用している理論的枠組みです。このモデルでは、人間の活動は線形的な入力・出力規則に基づいて生み出されるとされています。ある意味で、人間の心がコンピューターのように扱われ、ある情報が入力されれば、その入力に対して自動的に出力が決定されると想定されています。

すなわち、人間の心を入力と出力が一对一で対応するコンピューターに還元してしまう理論モデルです。このモデルの典型的な例は、統計学を駆使した心の説明モデルや情報処理モデルなどです。

興味深いことに、上記三つのモデルは互いに反目し合っているのですが、根幹を成す思想はどれも静的な構造モデルに由来します。つまり、自己組織化的な特性を持つ人間の活動と心の構造を完全に切り離してしまっているのです。

結論として、これらのモデルは、人間と環境を切り離してしまい、決して両者がお互いに影響を及ぼし合う「動的な協働者」とみなされることはないのです。

47. ピアジェを始めとした段階モデルの限界：発達の線形性・非線形性

人間の発達過程に構造的特性を見いだす思想において、安定的かつ不可変の構造の存在が強調されます。例えば、こうした思想では、私たちのスキル発達プロセスの中に、確固たる規則性を見つけようとしています。

ピアジェの研究が残した功績は、こうした確固たる規則性、つまり発達構造が持つ不可変のパターンの存在に合理的な説明を与えたことにあります。ピアジェの論理は、私たちは自らの活動や解釈方法を規定する論理構造を構築する生き物であるとしています。

また、これらの構造が存在する恩恵を受けて、私たちは、多くの文脈にわたって同様の概念やスキルを適用できるとされています。要約すると、ピアジェ派の発達思想において、人間の認知活動が生み出される論拠を論理構造のみに還元してしまっているため、実際のところ、発達プロセスの中に見られる可変的な現象を説明することに失敗しています。

もちろん、発達構造の中に、ある種の規則性が見られることは確かなので、その点においてピアジェの功績を過小評価することはできません。実際、ピアジェが説く「普遍的な論理構造」という概念は、発達構造が持つ規則性を説明するのに最適であったがために、発達の可変的特性を無視するという限界を覆い隠してしまったのです。

こうした段階モデルは、人間の心の構造を静的なものに置き換えてしまったため、人間の心が持つ動的なメカニズムを説明することができませんでした。結果として、人間の発達が持つ非線形的な特性を蔑ろにし、形式的な論理を用いて発達の線形性を説明することに留まってしまったのです。

48. 新ピアジェ派の台頭: 静的構造思想とその批判者との対立史

これまでの記事では、人間の発達を静的なもののみならず思想に対して批判的な見解を示し、発達を動的なもののみならず思想に好意的な見解を示してきました。ここで注意しなければならないのは、確かに人間の発達は極めて動的なプロセスなのですが、発達構造が内包する規則性というものを蔑ろにするわけにもいきません。

つまり、ピアジェが提唱しているモデルは、人間の発達メカニズムを形式的な論理だけを用いて説明しようとしている点に限界があるのであって、そこで開示されている発達構造が持つ規則性に問題があるわけではありません。ピアジェの誤謬は、発達が持つ規則性から逸脱した現象、例えば、文脈が変化することによって発揮されるスキルレベルが向上もしくは減少するような現象を看過した点にあるのです。

ここで少しばかり、静的構造思想とそれに反する思想の対立史を概観してみたいと思います。ピアジェ理論の対立者はしばしば、普遍的な発達構造の不存在を証明するために、ピアジェの段階モデルが当てはまらない状況の特定に奔走していました。

それに対して、ピアジェ理論の支持者は、発達が持つ普遍的な構造や段階プロセスの確からしさを確証することに力を注いでいました。つまり、どちらの立場においても、自らの信奉する発達思想を強化することに精力を傾け、両者の間に何ら建設的な対話がありませんでした。要するに、ピアジェ理論の支持者にせよ対立者にせよ、異なる思想立場の研究成果に対して実に盲目的だったのです。

こうした不毛な対立は長らく継続し、発達理論のさらなる発展の足かせになっていました。しかし、1980年代あたりに、ジュアン・パスカル、ロビー・ケース、グレアム・ハルフォード、カート・フィッシャー、マイケル・コモンスを筆頭とした「新ピアジェ派」と呼ばれる学派が誕生し、こうした議論に終止符を打つ研究や対話が生み出されることになりました。

新ピアジェ派は、ピアジェがおこなったのと同様の発達測定状況下において、ピアジェが提示した結果とほぼ同じ発見事項が得られることを示しながら、測定の状況を変えれば、それらの発見事項も変化するというを示しました。すなわち、新ピアジェ派は、ピアジェが示した発達構造が持つ規則性を認めながらも、ピアジェあるいはその支持者が無視してきた発達の可変性も同時に実証研究によって示すという功績を残したのです。

49. 発達理論のパラダイムシフト: 発達理論の思想潮流

私自身の学習史を振り返ってみると、これまでは様々な発達理論家の理論や測定手法を学ぶことに主眼を置いていました。現在の関心は、もちろん発達理論のフィールドに存在する多種多様な理論や測定手法の理解を深めることにもありますが、それ以上に、より大きな視点を持って発達理論そのものを捉え直すことにあります。

言い換えると、多種多様な発達理論や測定手法が生まれてきた根幹部分の思想背景、すなわち、人間の発達に関する各論的な理論や個別の測定手法を超えて、それらを生み出し、それらを規定しているパラダイムに関心が及んでいます。ここで述べている発達理論のパラダイムというのは、西欧に起源を持つ発達思想の枠組みであって、今後は東洋思想に根ざされた発達理論のパラダイムについても探求していきたいと思っています。

発達理論という一つのフィールドを鳥瞰し、そのフィールドに立ち現れているパラダイムに目を向けてみると、興味深いことに、これまで個別の理論家や測定手法に焦点を当てていた時には見えなかったものが浮かび上がってきました。それは、現代の発達心理学に固有の理論的枠組みであったり、他の学問分野との関連性、古代西欧哲学から脈々と引き継がれている思想的影響、人間の発達を巡る様々な論争などです。

現在の発達理論というフィールドに存在するパラダイムを眺めていると、それがいかに過渡期を迎えているかが分かります。振り返ってみると、これまではパラダイムと無意識的に同化していたため、こうしたパラダイムのダイナミズムを敏感に感じ取ることができませんでした。

しかし、自分が立脚している思想的立場を客観的に眺めてみると、自分の発達思想というものがいかに既存のパラダイムに影響を受けているのかがわかります。また、現在のパラダイムが持つ方向性や動きに着目してみると、発達理論そのものがいかに動的に発達しているのかも掴むことができます。

現代の発達理論で議論されているテーマを探求し、過去の発達論争にも目を向け、古代ギリシャから連綿と受け継がれる思想源流を辿ってみると、トーマス・クーンが提唱した「パラダイムシフト」が現代の発達理論のフィールドにおいて生じているのを感じます。

奇しくも、カート・フィッシャーが指摘した「発達の非連続性」やエスター・セレンが提唱した「発達の跳躍」という現象が、発達理論そのものにも起こっていると実感しています。人間の発達は、一般的に信じられている考え方とは反して、連続的なものではなく、非連続的なものであり、ある発達段階と次の発達段階の間には大きな飛躍現象が発生します。こうした飛躍現象が、発達理論そのものの発達にも生じているのです。

こうしたことを考えてみると、人間が発達することと、クーンが指摘したように、ある科学的なパラダイムは連続的・累積的に進歩するのではなく、非連続的・突発的に変容するという過程は、実に共通点の多いプロセスであると思います。

50. 既存のパラダイムの死と新たなパラダイムの誕生

発達理論という一つの科学分野が経験してきた、パラダイムの転換に伴う苦難に目を向けてみると、パラダイムの変革が起こったというよりも、現在はその過渡期にあると述べた方が適切であるということを上記の記事で指摘しました。

カート・フィッシャーが指摘するように、発達理論が果たすべき主要な役割は、人間の発達現象が持つ動的な側面と可変性を明らかにすることであり、現代の発達理論家の幾人かが、可変性という概念を見直し、再構築している様子を見ると、パラダイムが劇的に転換したとは言いがたい状況にあります。

それを証明する事実として、発達理論の分野において、未だにデカルト的発達思想が支配的であり、その思想の影響下、発達思想の微小な修正が繰り返されているだけであるという現象が見られます。つまり、発達の可変性という現象は、徐々に現代の発達理論家の中で人口に膾炙するようになってきており、発達を持つ動的な側面は受け入れられ始めているのですが、動的な要素を受け入れるだけで適切な説明がなかったり、デカルト的発想が支配的である既存の理論を強化するために、発達の可変性という概念が乱用されている傾向があります。

現在、様々な発達理論家が発達の可変性について言及する状況にあり、そうした理論家のうち、誰がデカルト的な思考の枠組みに基づいて可変性という概念を用いているのか、また誰が可変性という概念を十分に説明し、デカルト的な思考のパラダイムを超えて発達現象を捉えようとしているのかを見極めていくことが求められています。

こうした状況を鑑みると、今の発達理論というフィールドにおいて、既存のパラダイムと新たなパラダイムの闘争、もしくは衝突が起こっている気さえします。人間の心の発達において、さらに高度な段階に発達するためには、既存の段階の「死」を経験する必要があるとされています。

発達にある種の「死」が不可欠であるのと同様に、新たなパラダイムの誕生には、既存のパラダイムの死が必要なのだと感じています。こうしたパラダイムの過渡期に身を置いてみると、発達理論のフィールドにおいて実に動的なうねりが生じているのがわかります。

51. ピアジェおよびコールバーグの段階モデル: 可変性の隠蔽

ピアジェを始めとして、ローレンス・コールバーグなど、段階モデルを提唱する発達理論家の多くは、発達を持つ可変性を無視する傾向にありました。これらの理論家は、基本的に発達を持つ可変性を測定の上で異常値や誤謬として扱っていたのです。

ピアジェは後期において、自らの思想が持つ限界点を認識し、代替的な枠組みを用いて人間の発達を探求していましたが、いつ・どのようにして人間の思考やスキルが変動するのかを説明するモデルを構築するには至りませんでした。

幾人かの研究者は、ピアジェは発達プロセスに存在する溝、つまり発達の可変性が持つ重要性を強調していたと主張しています。しかし、ある現象の存在を認めることと、それを適切に説明することは異なります。

つまり、ピアジェを始めとして、段階モデルを提唱する発達理論家は、認知構造と環境との間に存在する相互作用を説明することができず、そうした相互作用のプロセスを特定することができませんでした。これらの理論家は、スキル獲得に伴って生じる、全ての人間が持つ可変性に言及することはありませんでした。

要するに、段階モデルの信奉者は、発達プロセスに内在し、観察可能な発達の可変性を説明することなく、その存在を長らく隠蔽し続けてきたのです。以前の記事で発達思想のパラダイムについて紹介してきたように、こうした隠蔽行為は意図的におこなわれたというよりも、パラダイムの持つ力によって無意識的におこなわれていた可能性が高いです。このように考えてみると、既存の発達理論のパラダイムが発達理論の進展に与える影響というのは計り知れないものがあります。

52. 領域特定型発達モデルの誕生とその限界

カート・フィッシャーのダイナミックスキル理論は、あらゆる発達領域において適用できる測定の物差しを提供したため、「領域全般型発達モデル」と呼ばれます。それに対して、ロバート・キーガン、オットー・ラスキー、スザンヌ・クックグロイターなどの発達理論は、ある特定の発達領域に焦点を当て、その固有の領域に対する理論的枠組みと発達測定を提示したことから、「領域特定型発達モデル」と呼ばれています。

今回の記事は、領域特定型モデルの誕生背景について言及し、このモデルが抱える限界点について説明したいと思います。発達理論の歴史を紐解くと、1980年代後半から1990年代にかけて、古典的な段階モデルの限界が明るみになり、発達の可変性を示す研究成果が世に出されるようになるにつれて、既存の段階モデルは理論的な破綻の危機にさらされていました。

実際、チョムスキーの普遍的言語構造モデルを除き、古典的な段階モデルは当時、代替的な説明モデルなしには信頼性の高い研究をすることができなくなり、多くの研究者から見放されつつありました。そこで登場したのが「領域特定型発達モデル」です。

このモデルは、発達プロセスを普遍的な認知構造に還元することはないのですが、空間能力、言語能力、数学能力、論理能力、問題解決能力など、特定の領域内で通用される能力を生み出す発達構造というものが存在すると主張しています。これらの領域内に存在する構造は、しばしば「モジュール」と呼ばれ、実際の活動と切り離されて用いられがちです。

教育分野において、この領域特定型発達モデルは有名です。特にハワード・ガードナーの多重知性論などが代表的であり、ガードナーの領域特定型発達モデルは、世界中の学習カリキュラムに広く取り入れられるようになってきました。

領域特定型発達モデルは、発達や学習において鍵を握る特定の能力領域に着目し、発達理論や教育分野に多大な貢献を果たしています。しかしながら、領域特定型モデルを支持する多くの発達理論家は、特定領域を記述することに留まり、発達が内在的に持つ可変性にまで踏み込んで議論することはほとんどありません。

つまり、領域特定型モデルの支持者は、認知活動を領域局所的に説明することに終始し、領域横断的な特徴や領域間の関係性について説明することはないのです。要約すると、領域特定型モデルの支持者は、発達の可変性の存在を認めながらも、それを体系的に説明することを意識的あるいは無意識的に避けているのです。その点が領域特定型モデルの大きな限界です。

53. 発達の共時性:ロビー・ケースの実証結果

ここ数回の記事で、領域特定型発達モデルの限界について言及してきました。ここでもう一度おさらいをしておくと、領域特定型発達モデルの限界点は、発達の可変性を蔑ろにしているということでした。

もちろん、私たちはある特定の文脈、つまりある特定領域に基づいて能力を発揮していく生き物ですが、最新の研究結果は、領域全般的にわたって発揮される深層的な能力の存在を明らかにしています。その一つが、ロビー・ケースが実証した「発達の共時性」という現象です。

発達の共時性とは、ある特定の領域内で獲得された概念やスキルが、それと時間軸を同じにして他の領域内においても発揮されるようになることを意味します。言い換えると、特定領域の知識・スキルレベルが発達した際に、それと同時にその知識・スキルレベルが他の領域においても出現することを意味しています。

この実証結果は、領域特定型の発達論者に大きな驚きをもたらしました。どうしてかという、領域特定型の発達理論者は、複数の領域にまたがって発揮される能力の存在を認めていないからです。

実際のところ、ロビー・ケースだけではなく、1985年にカート・フィッシャーとルイス・シルヴァンが共同研究によって発達の共時性という現象を明らかにしています。ケン・ウィルバーのインテグラル思想の下、ロバート・キーガンやスザンヌ・クックグロイターなどの領域特定型の発達論者の研究成果にどうしても目が向きがちですが、領域特定型の発達モデルの限界点を認識し、発達の可変性を認めることは、発達理論の包括的な理解につながると思います。

54. 新生得主義の誕生とその限界点

発達現象の可変性が認められるにつれて、発達理論のフィールドの中に新しい思想立場が生まれました。それは、「新生得主義」と言われるものです。新生得主義も発達構造を静的なものとみなすパラダイムの傘下に置かれているのですが、既存の段階モデルに代替する理論的枠組みとして一時期注目されていました。

新生得主義を信奉する研究者は、人間の発達に関する優れた研究を数多く残しており、以前の記事で紹介したデカルト的発達思想に縛られた生得論と経験論を融合させることに成功しました。この融合的な発達思想は、形式的な論理に基づいた構造モデルを拒絶し、代替案として、内在的な発達の規則を提唱するに至りました。

しかしながら、内在的な発達の規則には、形式的な論理に基づいた構造思想と同様の限界が内包されていました。それは、発達構造を静的なものとみなすことであり、人間の動的な活動から生み出される可変性を説明できないことでした。

新生得主義の研究者は、人間の心が持つ可変性の一部に焦点を当て、数字、空間、言語などの領域に存在する内在的な能力の存在を証明しようとしてきました。こうした潮流の代表者は、言語学者のノーム・チョムスキーです。

チョムスキーは特に、言語の中に可変性が存在することを拒絶し、言語の可変性は幻想ですらあると主張し、全ての人間は根本的に同じ言語を話していると述べています。しかし、内在的な言語規則に焦点を当てているチョムスキー派の理論が提唱していることの多くは、実証的に何ら証明されていないのです。

言語の研究に関して言えば、生得主義・新生得主義のアプローチは、言語が持つ多様性を説明することができていないことに加え、様々な文脈において変化する言語の可変性も説明することができていないというのが現状です。

55. 新生得主義の研究:ピアジェが提唱した年齢水準の引き下げ

前回の記事で、新生得主義について簡単に紹介しました。今回の記事は、もう少し詳細に新生得主義の研究内容や発達に対するアプローチなどを紹介していきたいと思います。

新生得主義者は、ピアジェ派が子供の発達プロセスを明らかにするために用いていたタスクをより簡素化し、調査プロセスの中に、子供たちが与えられたタスクに取り組む際の支援もおこなっていました。

その結果として、新生得主義の研究者は、ピアジェが提唱していた発達の年齢基準を打ち壊す研究成果を示しました。こうした研究成果から引き合いに出された彼らの主張は、ある概念やスキルはピアジェが提唱するよりもずっと低い年齢で獲得することができるのだから、人間の認知構造は内在的なものであるに違いないというものです。

しかし、この主張は、可変性が持つ部分的な要素しか焦点に当てていません。つまり、新生得主義の主張は、ある概念やスキルが獲得される年齢基準を下げただけであって、実際には文脈や環境

に影響を受けて、ある概念やスキルが獲得される年齢基準が上がる場合を無視してしまっています。

結論として、新生得主義に基づく研究者は、発達の可変性を明らかにしたというよりも、単にピアジェが提唱していた年齢基準を引き下げること的成功しただけであって、発達を持つ動的な特徴を明らかにすることはできなかったのです。

56. ピアジェの貢献: スキル獲得の構成的なプロセス

ピアジェは、観察された発達現象に対して構成主義的な説明を加えたことで有名です。どういうことかというと、私たちは実際の活動を通じて、ある発達段階から次の発達段階へ移行していくとピアジェは説明しました。

例えば、5ヶ月ぐらいの幼児は、目の前にある物体を掴んだり遊んだりすることはできるのですが、目の前の物体がひとたび布かなにかで隠されてしまった場合、それらを探し出す能力はまだありません。8ヶ月ぐらいになってようやく、隠されている物体を探し出すことができるようになります。

つまり、生後8ヶ月の幼児は、ここで二つの能力を統合し、新たな能力を獲得したことになります。一つ目は、以前の段階で獲得していた物体を掴むという能力であり、二つ目は、物体を覆い隠している布を特定するという能力です。さらに新たな能力として、ある物体が他の物体(ここでは布)によって隠されているという事実を理解するという一段高度な能力を獲得しているのです。

ピアジェはこのように、幼児期から青年期にかけて、私たちがどのようにして能力を徐々に獲得していくのかを説明するモデルを提唱しました。ピアジェのモデルとは対照的に、前回の記事で紹介した新生得主義の代表的な研究者ベイラーゴンは、ピアジェが提唱する発達の年齢幅をより引き下げる結論を打ち出しました。

つまり、ベイラーゴンは、あるスキルや概念が獲得される年齢がかなり低いという調査結果を基に、それらの能力は生得的なものであると主張しました。しかし、ベイラーゴンの主張は、単純な早熟論に過ぎず、デカルト的な静的な発達思想に基づいていたため、人間の発達現象が持つ可変性を十分に説明することができませんでした。

この問題の核心は、私たちのスキルや概念が後天的に徐々に構築されていくという現象を単純化し過ぎたことにあります。与えるタスクを単純化し、ある概念やスキルを獲得する年齢基準を単純に引き下げるとは、結果として、発達が内包する構成的なメカニズムを曇らせることになってしまったのです。

57. 認知構造と活動の分離: チョムスキー派とピアジェ派の思想的限界

生得論者と多くの認知科学者はこれまで、人間の深層部分に存在する能力と実際の活動を切り離す思想特性を持っていました。こうした分離を提唱した代表的人物は、ノーム・チョムスキーです。彼が主張する普遍文法は残念ながら、実際に私たちが言語を用いてコミュニケーションをしている際に現れる多様性を十分に説明することができません。

つまり、チョムスキーは、彼の主張する生得的な言語規則と実際のコミュニケーションの場で用いられる言語活動とを切り離してしまっているのです。これと似たような考え方を発達心理学の領域でも見つけることができます。

例えば、ピアジェの提唱する認知構造モデルは、構造それ自体と認知活動を完全に切り離してしまっています。その結果として、ピアジェの構造モデルを信奉する発達論者は、実際の認知活動で見られる可変性を説明できないという行き詰まりを経験しています。

チョムスキーやピアジェの思想に影響を受けた、構造と活動を分離させる説明モデルは、認知構造をまるで脳と心に埋め込まれた固定的な規則であるかのようにみなし、認知構造は活動を生み出す文脈と独立して存在しているとしています。

要するに、これらの説明モデルは、活動を規定する固定的な認知構造の存在を強調することによって、認知・言語活動に存在する可変性を切り捨ててしまっているのです。これは、チョムスキーやピアジェの説明モデルだけに見られることではなく、領域特定型発達モデルや生得論者の発達モデルにも等しく見られます。

まさにこれらが既存の発達パラダイムに浸透している固有の限界点であり、新しい発達パラダイムは、これらの限界を克服する必要に迫られています。そこでは、単に発達の可変性を説明することが求められているのではなく、発達構造が持つ階層構造、ある文脈における他者との相互作用、発達の網の目構造という概念を駆使しながら、人間の思考・感情・行動が持つ動的な側面を明らかにするモデルを構築することが要求されているのです。

58. 構成主義的アプローチ: デカルト的発達思想・静的構造思想を超えて

身体的システム、心理的システム、社会・文化的なシステムなど、諸々のシステム間に存在する関係性の中で私たちは生きていると主張する構成主義的発達思想は、人間の発達に関して、デカルト的発達思想が見逃してしまった要素に着目することを出発点として誕生しました。

つまり、デカルト的発達思想および静的構造思想が持つ限界点を乗り越える説明モデルを提唱するべく、構成主義的発達思想が生まれたと言えます。人間の知識やスキルというものは、受動的に環境から得られるというわけでもなく、遺伝子から受動的に受け継がれるというものではありません。

そうではなく、私たち人間は、環境や遺伝子からの影響を受けつつも、様々な関係性の中で生きることを通じ、知識やスキルというものを徐々に構築していくのです。私たちは、実際の活動を通じて、社会的・物理的世界に参画し、より複雑高度な知識とスキルを獲得していきます。

このようにして獲得される新たな知識やスキルは、階層構造を持っており、これをカート・フィッシャーは「スキル」と呼んでいます。これまでの記事で強調してきたように、スキルは可変性を持ちながらも、その可変性の中に規則性も備えているという二つの特徴を持っています。

人間は関係性の中で活動する媒介者であり、常に様々な関係性の網の目に組み込まれながら、さらに新たな関係性の網の目を広げていきます。そして興味深いことに、様々なシステムを媒介して生きている私たちの活動の中に、複雑かつ可変的でありながらも規則性を発見することができます。

もし仮に、こうした可変性と規則性を蔑ろにしてしまったら、私たちは人間の発達を持つ真理に到達できないばかりか、発達に関するさらなる探求を間違った方向に導いてしまうことになるでしょう。

59. 発達という動的な運動: 年齢と発達段階との関係性

心の発達を静的なもののみならず静的構造主義の限界を超越するために、新たな発達理論の枠組みが求められていることをこれまで述べてきました。過去の発達研究は、静的な構造思想の下、あるスキルや概念が獲得される年齢を画一的に決定づけようとしたり、心の発達を線形的な分析モデルの範疇に還元しようとしていました。

繰り返しになりますが、発達が持つ可変性に光を当て、可変性に生起する秩序(規則)を発見することが現在の発達研究に突きつけられている一つの課題です。こうした課題を克服するためには、動的な発達思想に基づいた理論的枠組みと分析手法が不可欠になります。

人間の活動はそもそも動的なものであり、さらに高度な発達段階へ到達する際に、下位の発達構造と高次の発達段階を差異化し、統合化します。また刻一刻と変動する文脈に適応するために、私たちは実にダイナミックに思考や感情を生み出します。

そうした動的な思考や感情を生み出すのが、まさに発達構造です。いわば発達構造は、社会的・文化的な文脈に組み込まれた私たちの存在を瞬間瞬間に変動させ、規定するものであり、さらに個人の発達構造は他者の発達構造と相互に影響を与え合うという特性を持っています。

もう一つ心の発達に関して忘れてはならないのは、発達の形(プロセス)は多種多様であるということです。幾人かの研究者は、連続的な発達プロセスを提唱していますし、また他の研究者は、非連続的な発達プロセスを提唱しています。

結論から述べると、両者の主張はどちらも正しく、発達の形は連続的かつ非連続的なプロセスです。ピアジェを含めて、これまで多くの研究者が、年齢と発達段階を関係付ける研究を行ってきました。

しかし実際のところ、年齢と発達段階は一对一で結びついているわけではありません。それどころか、ひとたび測定の状況やタスクを変えたり、その時の感情状態が異なれば、私たちは実に様々な発達段階のパフォーマンスレベルを発揮することが明らかになっています。

つまり、私たち個人の発達史において、固定的な里程碑などは存在しません。そこに存在するのは、発達段階の浮き沈みという実に動的な運動なのです。

60. 現代発達理論を呪縛する4つの誤謬思想

刻一刻と変動するリアリティの中で、私たちの活動は多様性と可変性に満ち溢れています。もしそうした人間の活動が、線形的な手法で測定されることがあれば、線形的な変化以外の何ものも明らかにならないでしょう。

こうしたアプローチは長らく発達研究のフィールドに存在しており、それは人間の活動を一つの次元に押しとどめる力を持っていました。仮に人間の活動を多面的・多次的に捉えるアプローチが採用されるならば、人間の精神活動が持つ多様な側面を明らかにしてくれるでしょう。

カート・フィッシャーが指摘するように、人間の精神活動を線形的な一つの次元に押しとどめるアプローチは、人間が織り成す動的な活動を探求する足かせとなります。より具体的に、フィッシャーは、現代発達理論を呪縛する4つの誤謬思想の存在を指摘しています。

1. 「単一的な発達レベル・単一的なスキル」: 一つ目の誤謬は、ある瞬間において、私たちは単一の認知構造に基づいて機能し、単一的なスキルを持つという考え方です。この考え方に反して、実際には、私たちは仮に同じ状況下に置かれたとしても、複数の発達レベルを発揮し、多様なレベルのスキルを発動させながら生きています。

さらに、発達の網の目構造で見られるように、私たちは多様な発達領域を行き来し、それらを結びつけながら発達していきます。そのため、現代の測定手法は、多様な発達領域における複雑なプロセスを捉え、文脈に応じて変化する発達レベルとスキルレベルを適切に測定することが求められています。

2. 「単一的な発達のプロセス」: 二つ目の誤謬は、発達のプロセスを線形的あるいは決まりきった一つの形とみなしてしまう考え方です。しかし、実際には、これまで見てきたように、発達の形は実に多種多様です。

往々にして、二つ目の誤謬は、発達を後戻りできない線形的なプロセスとみなしてしまいます。しかしながら、カート・フィッシャーを含めて、多くの研究者が明らかにしているように、発達プロセスは非線形的であり、さらに後退現象も伴います。

マクロな視点を取れば、次の発達段階に到達するという発達の跳躍を遂げた直後に、発達の後退現象が見られます。またミクロな視点を取ると、新しいスキルを獲得する直前に、スキルレベルが一時的に後退するという現象が見られます。

3. 「単独で存在する個人」: 三つ目の誤謬は、私たちは単独で何かを学習し、発達していくという考え方です。この考え方に反して、私たちは通常単独で活動しているわけではなく、それどころか、誕生の瞬間から他者をパートナーとして、社会生活を営むことをある意味宿命づけられています。

そのため、多様な文脈の中で共にリアリティを構築し合う他者を含めて研究対象とすることは、より現実的であるばかりか、人間の発達プロセスをより鮮明にしてくれます。

4. 「単一的な文脈」: 最後の誤謬は、単一の文脈あるいは一つのタスクに絞って発達測定をおこなってしまうことです。この考え方に反し、より正確な発達測定をおこなうためには、複数のタスクと多様な文脈を織り込む必要があります。

複数のタスクと多様な文脈を発達測定に組み込んで初めて、複数の発達レベルや多様な発達プロセスが明らかになります。つまり、人間が持つ動的な側面および可変的なスキルレベルを明らかにするためには、様々な条件設定とそれら複数の状況における多様なタスクを組み込んだ測定をおこなう必要があります。